

野田九条通信

2016年10月130号

野田・九条の会 事務局
☎04-7122-0502



野田 九条の会

検索

私たちはどういう方向へ向かうのか 徹底した議論を！

野田・九条の会9月定例会では、8月の参議院選挙結果は残念な結果であったが、あきらめず、具体的に出てくる問題についてきちんと対峙していく、そしてこれまで以上に多くの人たちに憲法と安全保障問題について語りかけていくことを確認しました。

沖縄の基地拡張問題、北朝鮮の核ミサイル発射実験、南スーダンへの自衛隊の派遣、中東の戦争、中国との関連等々：だからアメリカに協力

し武器をもって守らなければならぬ...という安倍政権の方向性にはノーを。武力での解決には反対。しかし「核兵器を持たずに持っている抑止力に頼っていいののか」という根本的な議論も必要だと意見も出ました。

これから、憲法改正の判断を私たち国民に求められる時が来ます。そのためにしっかりと学習し運動を広めていきましょう。

山口二郎さん 講演決定 11/26(土)

法政大学教授
山口二郎さん
学者の立場にとどまらず、現実の政治に積極的に発言を続け、民主党のブレーンともいわれる山口二郎教授。自民党ではない政権は可能か、私たちの未来をどう描くかのヒントが聞けると期待しています。

詳しくは九条通信11月号と一緒に配布のチラシをご覧ください。

平和のついで・のだ 300人の市民が参加

8月21・22日に開かれた平和の集い・のだ実行委員会は9月19日反省会を開き今年の集会のまとめを行いました。

戦争の体験を話せる人の高齢化で難しくなる中、今年の高齢者の牧野さんの満州引き上げのお話は貴重な時間だったこと、映画、講演、ドラマリーディングなどそれぞれについて反省や評価が話されました。高校生の朗読劇は今まで最多の28人の出演、生徒の生活環境の変化の中で、社会の中の問題を考えるきっかけになったのではないかと、

また実行委員の側も勉強になったと評価しました。

展示については、戦争の歴史と現在に向き合うことを出発点に、平和への希望が呼び起こされるよう工夫することなど意見交換しました。来年は櫻のホールか文化会館を使って、充実した会にしたいと準備を始めています。



①今月の予定

10月8日(土) 13:30~16:00
野田・九条の会 定例会 「決断なき原爆投下」視聴
中央公民館 1階会議室

10月9日(日) 16:30~17:30
9の日行動 九条通信配布行動
梅郷駅通路 野田九条の会

10月19日(水) 18:30~
安倍政権の暴走止めよう！
自衛隊は戦地に行くな！
10・19大集会 一緒に行きませんか？
愛宕駅 16:07発
衆議院第二議員会館前 柏行き先頭車両乗車

10月22日(土) 13:30~16:00
DVD上映とディスカッション
「外国人記者は見た！ニッポンの働き方は変えられるのか」
総合福祉会館 子どもの未来を語る会

11月6日(日) 13:15~16:30
DVD上映とディスカッション
「ヘイトスピーチと対策法施行を考える」
南部梅郷公民館 南地域九条の会

遅すぎたもんじゅ廃炉！ 原発廃止へエネルギー政策転換を！！

「新電力」利用者に課せようとする”廃炉新税”

酷暑が和らぎ初秋の風を感じる頃、熱くなる報道がまたなされた。電気料金に競争原理を導入しようと電力の自由化で誕生した「新電力」に原発廃炉費用を新たに負担させる案が経産省で検討されていることである。

原発からの電力を使いたくないと考える電力利用者は新電力と契約しているが、この新電力が負担している託送料に上乗せし、利用者に転嫁させようとするものだ。つまり原発電力から縁を切ったつもりが、半永久的に続くであろう廃炉費用をさらに負担させようとするのではないか。

新電力の利用者は既に原発に関わる費用は電気料金に含め電力会社へ支払って来ている。ここにきて廃炉費用が足りないとして本来自社で処理すべ

きものを需給契約していない使用者に求めるのは筋が通らない。「原発は安全で最も低コストな電源」との説明は今となっては虚しく聞こえる。電力会社を独占企業、総括原価法で優遇させてきた経緯を踏まえ”廃炉新税”の検討を止めるべきだ。

9月15日「もんじゅ廃炉で調整」と原発政策の一大転換となることが報じられた。「核燃料サイクル」の中核を担うとされてきた「もんじゅ」は、度重なる事故と技術的な不透明さで既に破綻していったので当然な判断だ。これまでも使用済み核燃料再処理、核のゴミ、東電福島第一原発事故、廃炉など対応の見通しが立たない中、思い付きのように国民に負担を強いてきている。今政府が成すべきことは政治の英知で原発を廃止し、電力会社と新電力が共存できる仕組みを構築することではないか。

片桐 直勝

マスコミへの手紙

東京新聞「ミラー」への投稿

9月6日付けの貴紙「大波小波」の記事は先ごろ解散した SEALD^s を徹底的にこき下ろす内容で、立憲主義を無視する安倍政権に対してメディアとして断固監視していくと宣言し、民主主義を守ろうと立ち上げた SEALD^s にも好意的な記事を載せてきた「東京新聞」でもこうした記事を載せるんだ、という意外な思いを抱いた。同じ新聞社にも多様な意見があるということだろうか。

「野党共闘を推奨したが、ポピュリズムと同世代の無関心の前に敗北した」とか「日本の政治的支配層に対し、対抗文化を提示できなかった」とか「とりすました学生ばかりで SMAP の面々のような個性すらない」等々、言いたい放題である。私はこうした考え方を否定しているわけではない。なるほどこういうとらえ方もあるんだと思う。

そのことを踏まえたうえで私はこの（秀）氏の意見に異議を唱えたい。SEALD^s の代表的メンバーの一人である奥田愛基さんはラストメッセージで「民主主義に観客席はない」という趣旨のことを述べら



れていた。私からすれば（秀）氏はこの観客席にどっかと腰を下ろし、SEALD^s の若者たちが「戦争法」等の悪政に反対の声を国会前で絶叫しているときにも高みの見物をしていたのではないかと勘繰りたくなる。「それではあなたはこの間何をしていたのか？」と問いたくなる。かなり辛らつな言い方だとは思いますが、未熟ながらも真摯な声を上げ続けた SEALD^s の若者たちに向けた（秀）氏の冒瀆的な言葉の数々から比べれば私の言葉はまだ生優しい方でしょう。

それとも、（秀）氏の真意は SEALD^s の若者たちを誹謗中傷するのではなく、暗に「また別の姿を持って現れて欲しい」という熱烈なラブコールにあるのだろうか。そうとすれば私は（秀）氏の周到な奥深さに感服するのだが…。

高崎 久男